

高知新聞には60年代から読者からの投稿詩が掲載されていた。80年代は片岡文雄さんが担当されていた(12年間くらいだったと記憶している)。もう30年から35年くらいむかしの話だ。ただそのころは「詩」という思索を選択しているひとがおおく、週一回の掲載日には佳作がたくさん掲載されていた。そのなかに田村伸一郎さんがいた。20代後半から30代にかけての年齢で、いま現在このspaceで書いている同年代の中原繁博さん(当時、船乗りだった)とは、ますますおの中原、しなやかさの田村として双壁をなしていた。

田村さんには84年に2冊、86年に1冊の詩集がある。投稿入選詩を中心にまとめたものだ。84年の詩集『水の眼球』から「白磁」全篇。30代初めのころの作品である。

その  
白い容器の中に みたされる  
静かな音

めぐる輪のように  
ひと雫ずつ  
おとされる記憶は

どこかに 肌のぬくみをもって  
表面を落ちて

雨の中で

しての存立を見つめかえしていこうとする特長があった。

ほくは84年から87年までのあいだに高知新聞入選常連者に「地方紙の投稿欄で入選したと喜んでいただけではダメだ」とエラそうな声をかけて『水壘』という同人雑誌を13冊発行している。五人前後の人が毎号書いていてほくは発行編集人として裏方の立場で出発したのだが、終刊前何号かは(ついで)作品を発表している。(ついで)手が出る。これはほくの悪い癖である。

9号から田村さんの「藍の水 あるいは宗右衛門のこと」全篇。  
暖簾のあいだから  
虫喰いの主人がのぞいている  
主人は 虫にくわれたまま眠りはじめる

細い指が一枚の水の衣裳をぬいで  
ねむりから取りだすと  
ひと針ひと針  
主人は 藍色に染って  
累代の闇へ かしいでゆく

この町の裏手は  
堀川で  
そこには いくすじもの藍が流されていた

愛の水が涸れてから この川は  
時に 奇形の魚を生むことがあった

ふきあげていた 噴水のゆくえ  
ばらばらになった家族  
片方だけの靴

ゆっくりと われてゆく  
人と人のあいだで

わたしは 小さくふるえながら  
次に  
くるものをまっている

ただひとつ 残された  
容器は  
かたちであることに耐えている

田村さんの詩学が十二分に発揮されている詩だ。「詩はひとの心におとされる雫のようなもの」であり、「この世界が固定したものではなく(現象)であり」「精神の内部はもっと深い諧調をふくんでいる」(『水の眼球』あとがき)という認識がくつきりと浮かびあがっている。ひとはみな、いや、事物はみな、「かたちであることに耐えている」という彼の認識は深い孤独と虚無に包まれている。音、記憶、ぬくみ、が「かたち」のなかにみたされたあとであるのならなおさらである。彼にはこのように、人としての孤独感をたおやかに語ることでみずからの孤と

虫喰いの主人は 磔刑に結ばれたと  
古い文書は言う

水の衣裳は転倒を成就したと思える

紺屋町を折れると鍛冶屋町  
さらに美しい形で  
この町とかの町を割って  
藍の水は流れていた

かつて 紺屋をささえた 水の  
ありかは  
いま どこにも見あたらない

わたしの手にふれた 藍の生地は  
磔刑にそまった 血のままに  
かれのかびくさい胸に  
水の折れ目を記している

選者だった片岡さんは、彼の詩はこしらえものであり、幾分美学的な要素に走っている、「美学でやっちゃあいかん」(これは片岡さんの口癖のようなものだった。もうひとつの口癖は「歌うたらいかんぜよ」だった)と否定的だったが、彼の作品には、この世間から疎まれ、阻害され、生き難さを感じながらも、襟を正して、自分の生を全うしていくという意気込みが、意気込

みに感じられない婉曲な物言いで語られている作品が多く、その姿は泥臭くなく、息も弾まないが、彼自身の内面ともの静かに対話している、とぼくはおもって、率直に自分を語ることの気恥ずかしさを田村さんは持っている、と感じていた。だから、自分のスタイルを深化させていい詩人になってほしいと願っていたが、諸々の理由があつて詩を書かなくなった。表面的な理由は聞かされたが、彼の心のなかでくすぶった。詩から離れよう。という真の気持ちは、たぶん、わからないままだったとおもう。ひとには他人に語っても語りつくせぬものがある。田村さんは『詩学』の投稿欄にも投稿していて、詩にたいする熱意が人一倍あつたからぼくとしては残念なおもいでいっぱいだった。

そののち彼は「田村七里」という号で俳句を書きはじめた。

高知新聞の読者投稿欄『俳壇』に投稿したり、NHKラジオの俳壇なんかも投稿していて、ほんの偶然だったが、ぼくが聞いていたときの俳壇のコナーで「入選者に電話をしてみましよう」とアナウンサーが彼に電話したことがあつた。「いま配達の仕事で俳壇聞いてなかったんですよ」という声を聞いて、「おお、伸ちゃん元気だな」とおもったものだった。

詩を書かなくなつてはいたが、長い付き合いなので本誌を発行のたびに送っていた。そのつどハガキで礼状が届いていたので、2ヶ月に一度は彼の無事を承知していた。

昨年暮れ、高知県芸術祭執行委員会というところが主催する年に一度の公募展『第44回高知県芸術祭文芸賞』で彼が一等賞の「芸術祭文芸賞」を取つたと新聞に紹介されていた。「おつ、

やつたね伸ちゃん」とおもつた。ハガキでも書こうかとおもつたが、近々Spaceが出るのでそのとき「よかつたね」と添え文をしようとおもっていた。ところがそれからすぐ、彼が急逝したという知らせをある俳人から知らされた。まったく寝耳に水である。もしかしたら間違いかもしいれないと（間違いはないのだが、もしかしたらという気持ちで）新聞社の人に調べてもらつたらほんとうだった。もうひと月前に急逝していて、芸術祭の授賞式には義理の姉さんが出席することだった。義理の姉さんとは大阪にいるお兄さんの奥さんのことだろう。彼は高知市内の生家でずっとひとり暮らしだった。退職してからは児童保育（このへんのこととはよくわからないのだが）に携わつてると言っていた。

12月下旬、高知県芸術祭執行委員会から『第44回高知県芸術祭文芸賞 入選作品集』という本が届いた。そのなかから田村さんの「cancer」という作品を転載させていただく。

生かさぬように殺さぬように

人間をしゃぶりつくすのが

腕のいいcancerというものだ

悪代官のように百姓の

顎を撥ねてしまつては元も子もない

努力の年月が無駄というものだ

中には性悪な奴もいて

あらゆるところに流れついて

人間を破壊しはじめる

若気の至りというところだ

勇み足はcancer道にも悖る

というのがおれたちの一致した見解だ

人を生かし自分も生きるのが

上達したcancerのあかし

甘つたるい喜びの日々も

悲しみの底なし沼も

いっしょに味わうのが

おれたちの慣わしだ

はねあがり者がいて

数ヶ月で命を奪つてしまふ

抗癌剤やら放射線やら

敵さんもやたらとぶちこんでくる

挙句に正常な細胞まで虫の息で

見ていてぞつとする光景だ

おれの宿主のばあさんは九十三で

いたつて元気

おれはひっそり生きてきた

欲ばらずに気づかれずに

ばあさんが目を閉じたとき

冷たい風がさあーとおれの上を流れ

そのときおれはおれの終りをしる

ばあさんが死んで数時間

闇の中で潮騒のように物音が

遠のいてゆくのをきいている

そして最後に

無音の闇が残されるばかりだ

詩の部門の一等賞らしいが、「おれはひっそり生きてきた／欲ばらずに気づかれずに」などというところが彼の生き方をあらわしているようで、彼の性格を知っているぼくには「そうだよな」と首肯できるころではあつたし、作品全体がみずからの死を予言しているような趣もあつて読むのがすこしつらい気分がしたが、作品としては凡庸なもので残念だった。これぐらいの作品は誰にでも書ける。田村伸一郎の独自性のみあたらぬ。とはいえ、田村伸一郎はこの詩を残して死んだ。詩をふたたび書く準備ができていたとしたら、60代にはいった作品群を読みたかつたといま、ないものねだりのような気分になつていて。

ひとは死ぬために生きている存在でもあるのだから死は避けられない現象である。しかし、感傷的なことを言わせてもらえぬなら、死は年齢順のほうがいい。

一言。

「灰になつた伸ちゃん、さよなら」